
Fly Hight Fantasia

龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F l y H i g h t F a n t a s i a

【Nコード】

N 0 3 2 9 Y

【作者名】

龍

【あらすじ】

P C 用 S T G 『東方Project』×携帯用RPG 『フライハイ
イトフロンティア』

二つのゲームのクロスオーバー二次創作小説です。
原作無しでも読めるよう出来る限りの説明を入れます。
毎週末更新予定。

『エルディア大戦』『ログ・ダーナ事変』。

空の世界を滅ぼしかけた二つの戦いは、後に英雄と呼ばれるようになる若者たちによって防がれた。

あれから10年、再び空の世界に危機が迫る。

空と地と幻想、三つの世界を巻き込む大異変が起こりしとき、それぞれの世界に住む者たちはどう動くのか：

Prologue

Fly High Fantasia I

（銀と紅が交ざりし時、幻想に埋もれた齒車が再び）

とある部屋に女が居た。

その部屋には窓が無く、ドアの代わりに鉄格子があった。
暗い部屋には申し訳程度に家具が置かれていた。

その女には愛する夫が居た。

慈しむべき娘も居た。

かつて苦楽を共にしたかけがえの無い仲間達も。

女は何故自分がこんなめにあっているのか解らなかった。

しかし、自分はもう家族や仲間達に会えない事だけは理解でき、泣いた。

今では涙すら枯れた。

今日も部屋の管理人は女を哀れんだ。

この管理人は女をこの不衛生な牢獄へ閉じ込めた組織の末端であり、実行犯の一人だった。

若い女を家族から引き剥がし、食事すら満足に与えられない悪環境の中で監禁するのは不本意ではあったが、上の命令に逆らえば自分

の命が危うかった。

せめてもと、自分の食事の一部や、身体を拭く為の水やタオル等を差し入れし、きつと誰かが助けに来てくれるから希望を捨てるな、と励ましていたが、それだけの事しかしてやれなかった。

今日もただ何もせず、希望も悲観もなく無気力に眠っているその女の名を『ニア・シルバード』と言った。

とある場所に、紅い館があった。
その館の地下にはいつの間にか、得体の知れない化け物が住むようになっていた。

館の主人たる女は、部下達を引き連れ化け物を追い出そうとした。
濃緑の体表に、上半身だけの身体を持ったヒトガタの化け物は、自身の力の一部を分けたフェイクを大量に作り出し迎え討った。

オリジナルのヒトガタに挑んだ主人たる女は戦いに負けた。
部下達は彼女を助けようとするもフェイク達に襲われ、皆殺しにされた。

主人たる女は、自身に忠誠を誓っていた従者の命と引き換えに地上へと脱出させられた。

それ以来、地下へ潜る階段は固く封印され、存在を秘匿された。

時が経ち、かつての忠誠厚い部下達に代わる親友や新たな従者ができた。

今や、その紅い館に封印された箇所がある事を知っているのは主人ただ一人になってしまった。

その主人たる女の名を『レミリア・スカーレット』と言った。

Prologue 2

そこは何処までも続く、広大で分厚い雲にて地上と区切られた空の世界“クラウドディア”。

雲の上に浮かぶ多数の浮島に人々は寄り集まり、国を建て、暮らしていた。

クラウドディアに住むとあるジャーナリスト、ラムデイス・ベインは、自身の発行する雑誌レッドジャーナルにおいてこう語った。

「かつてより、クラウドディアではその限られた領土をめぐって各国がいつ終わるとも知れぬ争いに明け暮れていたが、10数年前に起こった、地上の世界“エルディア”の侵略、そして続けざまに起きた『ログ・ダーナ事変』をきっかけに、クラウドディアの西半分“バルディア空域”に所属する五ヶ国が結びつきを強め、共同体“バルディア連合”を形成するにいたった。

それを機に、空を覆っていた混乱は急速に収まり平和が訪れたかのように思われたが、あれから10年が経った今、再び空は戦火に包まれた。その切っ掛けと予兆は、先年のとある事件と見る事が出来るだろう……」

一年前。

強大な軍事力と、それを背景にした政治的発言力によりバルディア連合の盟主として空に君臨するカイゼルシュルト帝国。

その国名ともなっている帝都カイゼルシュルトの北にあるカイゼル

シュルト城、王の間。

「レイナスよ、遅いとは思わぬか？」

「はっ、確かに」

玉座よりこの軍事大国を、ひいては連合を牽引してきたカイゼル国王と、そのそばに立つ1人の男性。

レイナス・シルバーロードは今年で32歳という若さだが、BUNF (Barhdia United Nations Force
バルディア連合軍の意) の大将として、カイゼル正規軍の老将アブドラと共にBUNFカイゼル本部を任せられる程の実力者であり、また、エルディアとの戦いにおいて幾多の武勲をあげ、彼の仲間達と共に空の英雄の1人としてバルディア中にその名を知られる。

その爽やかで柔和なルックスと相まって各地にファンクラブが出来るほどの人気ぶりである。

彼らは今、この王の間においてレイナスの仲間の1人であり、現在はBUNF少佐の地位にあるロナード・ナイトスターを待っていた。突然の謁見を求めてきたロナードに対し、レイナスと仲間達を深く信頼していたカイゼル王は何の疑問も抱く事無く謁見を許可、レイナスと共に彼の到着を待っていたのだが、肝心のロナードが約束の時刻を過ぎてもやってこない。

ルールには忠実な性格のロナードには珍しい事態に、首をかしげながらも待ち続けた。

「陛下、ロナード少佐が参られました！」

「ようやく来たか、直ぐに通せ！」

「はっ！」

1人の近衛兵が彼の到着を知らせた。

王の命を受けて開かれた門より、灰褐色の髪と切れ長の瞳を持ち、レイナスとは対称的に寡黙で冷淡な性格で、彼とは士官学校時代からの付き合いであるロナードが静かに歩を進め、玉座の正面で片膝を付いた。

「陛下、お忙しい身にもかかわらず、謁見の要請を受け入れて下さり、有難うございます」

「……ロナードよ、そなたが遅刻とは珍しいな。して、この急な要請、何かあったのか？」

淡々と言上を述べるロナードに、王はやや心配げに彼に問うた。

「…いえ、どうしても陛下に頼みたき儀がありました故、こうして参った次第であります」

「頼みたい事とな？言うてみよ。この王に出来る事であれば、叶えようではないか…カイゼルはそなたのこれまでの忠義と武勇に全力で応えよう」

言葉の一つ一つから深い信頼が読み取れる温かな口調に、ロナードはすっと立ち上がり、左腰の長剣を引き抜いた。

「陛下…」

「ロナード、何をしているのだ…？」

「死ね」

「!？」

剣を肩口で水平に構えカイゼル王に飛び掛かるロナードの刺突を、横合いから割り込んだレイナスが左腰の短剣で抜きざまに切り上げ防いだ。

「…邪魔だ、レイナス」

「ロナード！お前、自分が何をしているか解ってるのか！？」

「ああ、解っている。王の暗殺だ」

「それは何故だ、答えろ！！」

「それを知る必要は無い。邪魔をするつもりなら、お前から消すぞ」

「レイナス將軍、陛下を連れて御逃げ下さい！此処は我らにお任せを！」

「隊長、やめるんだ！」

「者共、かかれッ！！近衛の名に掛けて、反逆者ロナード少佐を捕えろッ！」

近衛隊長の空気が震えるほどの怒号とともに、王の間を警備していた近衛兵達が一斉に己の得物を手にロナードに襲いかかった。

「……邪魔をするな」

繰り出される大剣や槍を次々といなし、その手の長剣が空を一閃するたびに、強者揃いのカイゼル軍でも一握りの者しか名乗る事を許されない“カイゼルナイト”の称号を持つ者だけで編成された近衛兵が地に倒れ伏してゆく様は、ロナードが空の英雄の1人に数えられる所以をどんな言葉よりも雄弁に物語っていた。

「皆、下がれえッ！！」

「將軍！」

右腰の長剣も抜き、長短一對の双剣『イオメティス』を握ったレイナスがロナードに斬りかかる。

「ロナード、お前を、斬る！」

「…面白い、勝負だ。レイナス」

「行くぞっ!!」

次の瞬間、双剣の強みである手数の方を多さを活かした、凄まじい連撃がロナードへ飛ぶ。

幾多の悪を屠り、周囲から“ジャステイス”と名づけられた、息つく暇も与えない双剣の連舞を一刀を持って受け続けるロナードだが、互いの剣を打ちつけ合う事20回を越えたあたりで、ついに受けきれなくなった彼の防御をすり抜けたレイナスの剣がロナードの首筋でピタリと止められる。

「ロナード…：教えてくれ、何がお前を駆り立てたんだ？」

「…俺を、斬るんじゃないかったのか？」

「うああッ!？」

ロナードからの返事を待っていたレイナスの右胸に長剣が突きたてられた。

レイナスが咄嗟に身をひねったが故に急所は外れたが、彼の纏う純白のローブに紅い染みが一気に広がっていく。

「言っただろう、それを知る必要は無いと。つくづく甘い男だな」

「うぐ……」

「邪魔をするなら消すとも言ったはずだ」

ロナードが剣を振り上げた時、再び門が勢い良く開かれ、王の間の騒ぎを聞きつけて集まってきたカイゼル兵らが部屋になだれこむ。

「……陛下、御無事ですかあッ!!」

「…え、ロナード少佐!？」

「さて、少佐なら、さっきその通路で……」

「チッ、面倒な……」

カイゼル兵らを一瞥したロナードは剣を鞘に戻すと、レイナスには目もくれずに窓を突き破り、そのまま城外へと消えていった。

元BUNF少佐ロナード・ナイトスター、カイゼル王暗殺未遂疑惑により国際指名手配。

以後、広く凶悪犯逮捕につながる情報提供を呼びかけるも、一年経って未だ有力な情報は得られず。

Prologue 2 (後書き)

人物紹介

レイナス・シルバーロード

年齢 32

身長 178 cm

薄い茶色の髪に、やや幼さを残す大きめの黒い瞳。

多少柔らかさを残すが意思の強さを感じられる顔立ちをしている。
寝起きが非常に悪い。

カイゼル士官学校を次席で卒業し、双剣の扱いにおいて比肩しうる者はいない。

ロナードとは士官学校時代からの親友だった。

人を疑う事等が苦手で正義感が強いまっすぐな男。

ニア・シルバーロードとは7年前に結婚した。

ロナード・ナイトスター

年齢 33

身長 182 cm

灰褐色の腰まで届く長髪に切れ長の鮮やかな青い目。

その端正な顔立ちは異性には人気だが、同性には冷酷さを感じさせる嫌味な顔と言われる。

士官学校主席であり、剣術だけでなく策謀等にも才を発揮する。

レイナスの愛剣イオメティスは、ロナードが友情の証として彼に送った物。

長き歴史の中で世に忘れられていったものの最後に流れ着く楽園、『幻想郷』。

その幻想郷の一角、霧の湖の中央の浮島に建つ館『紅魔館』。

紅魔館地下1Fの床と2Fの天井の一角をぶち抜いて作られた大図書館。

「小悪魔、これは何？」

「……これは初めて見ました。パチュリー様なら何か分かるかもしれません」

この館の主であり、自らも吸血鬼という種族の妖怪であるレミリア・スカレットは、自身の百年来の親友である魔女のパチュリー・ノーレッジに会おうとこの図書館を訪れたのだが、当の本人が不在。

帰ってくるまでの時間つぶしにと図書館内を散策していた所、かなり奥、本棚に入りきらず積み上げられた大量の本の山から錆つき、ぼろぼろになった鍵のついた小さな箱を見つけ出した。

その箱についてここの司書であり、パチュリーの使い魔を務める小悪魔に問う。

「そう…ッ！」

「あっ!？」

レミリアは吸血鬼の怪力をもって箱を無理矢理開けた。中に入っていたのは古い手紙と一冊の薄い本だった。

『世 生る全ての人妖 告する。この幻想の 園を新天 と呼び、武 をもって奪 取ろう た奴らは、まだこの地をあきらめないだろう 奴 強い 幻 中にその を轟 せた大妖ですら何人も ち取ら いる。忘れるな、警戒 るな。奴らは異 界から突然やつ る。 の本に 達有志 知って る限りの奴ら 情報を記す。役立て れ もっ も、あの自称賢 とかう女は忘れさせ としているが 愚か い事だ。自分 りで背負 もうとし がる 神村 華 』

それは染みがあったり、所々がかすれているせいで読みにくく、全容を把握する事は困難と思われた。

「何故こんな物が此処に？」

「……さあ、私にはわかりかねますけど」

手紙を箱に戻し、続いて本に目を通し始めたレミリア。

最初はただの興味本位のようなだったが、あるページに書かれた拙い挿絵と文を目にしてその表情が陰しくなる。

「応永26年、西暦なら1419年ね……………小悪魔」

「はい…？」

「この本と手紙は私が預かる。この事は私が良いと言うまで他の皆には黙っておきなさい」

「?…はあ、わかりました」

「絶対よ。もし破ったら…その首狩り落としてやるから」

「!?! 了解ですっ、絶対言いません!」

何の前触れもなくレミリアの本気の覇氣と殺氣を向けられて、突然の事に竦み上がった小悪魔が床に伏せながら誓った。

「解ればそれでいいのよ。じゃあ、急用が出来たから、今晚から数日くらい家を空けるけど、心配も供も要らないと伝えておいてね」

レミリアが手紙と本の入った箱を抱え図書館から出たところ、帰ってきたパチュリーと鉢合わせになった。

「あら、レミィ（レミリアの愛称）。どうしたの？ 貴女が此処まで来るなんて珍しいじゃない。私に何か用があるんじゃないの？」

「そのつもりだったけど、もうどうでも良くなったわ」

「…その箱は？」

「これは気にしないで。パチュ（パチュリーの愛称）や皆には関わってほしくない事だから」

「そう、なら良いわ……無茶はしないでね」

「留意しとくわ」

その晩、皆が寝静まった頃を見計らい、日傘と例の本、そして武器の愛槍を持って館を抜け出したレミリアは西へ飛ぶ。

本の記述が正しければ、幻想郷の西にある場所への入口がある筈である。

「『エピル』、あの化け物の姿をまた見る事になるなんてね」

夜目を利かせながら飛ぶレミリアの脳裏には、ある昔の記憶がよみがえっていた。

幻想郷の西端に位置する場所には、何百年も昔から人の手の入らず放置され続けた広大な森がある。

この森には人はもちろん、妖怪、妖精ですら立ち入らず、また立ち入らないことがルールとされてきた。

広く名を馳せた古豪達皆口をそろえて踏み込む事を禁止しているが、その理由については何一つ語る事は無く、一説には大妖怪ですら恐れさせるような何か封印されているのでは、と言われている。その何らかの事情を知るものと知らないものの境がちょうど約600年前にあり、知らない者の1人であるレミリアは例の記述との関連性を疑っていた。

1-1 (後書き)

人物紹介

レミリア・スカーレット

年齢497

身長147cm

見た目は10歳程度の少女だが、中身は既に500歳近い吸血鬼で、紅魔館と呼ばれる、血のような赤い色をした館の主人。直射日光に触れると身体が霧状になり消滅してしまう為、常に日傘を手放さない。そして、肌が病的に白い。

パチュリー・ノーレッジ

年齢不詳

身長159cm

レミリアの百年以上に渡る親友の魔法使い。

無属性を含めた全属性魔法を操る事が出来る。

ただし、喘息体質の為あまり激しく動き回る事が難しい。
本の虫。

小悪魔

年齢不詳

身長163cm

パチュリー[°]の使い魔。本名は不明。

パチュリーが攻撃魔法中心なのに対し、小悪魔は補助・回復魔法を中心[°]に扱う。

気が弱い。

なぜ悪魔が癒しの力を扱えるのかに突っ込むのは無粋と言うものである。

幻想郷・西端の森

意気揚々と踏み込んでみたのは良いものの、少なくとも600年以上は放置されていた森にまともな道など存在せず、細い獣道を生い茂る草木や藪で腕を切り、衣服を傷付けながらかき分けて進む。

途中幾度も足を踏み外しかけ慌てて飛び上がり、入り組んだ木々の幹や枝に身体をぶつけながら三時間は歩いただろうか、自らの背の丈以上ある藪を抜けたレミリアの目の前に古びた小さな鳥居が見えた。

鳥居と注連縄はなぜか内側を向いている。

森の中をまっすぐに歩いて来たのだから普通はレミリアの側へ向けて立っているはずである。

鳥居と注連縄は聖域である“常世”と俗の“現世”の境界を表すものであり、それより内側に穢れたものが入ってこないようにする役割がある。

それが向こうを向いているのなら、それは穢れがそれ以上此方に入ってこないようにする意味合になる。

その向こうを目指して鳥居を潜ろうとしたとき、レミリアの周囲が急に明るくなった。

「！」

背中の槍に手をかけ素早く振りかえったレミリアの更に背後から声

が掛かる。

「よう、嬢ちゃん。こんな草木も眠る夜更けに余人の立ち入らない森へ何の用だい？」

彼女の後ろにはランプを手に提げ、左腰に太刀を差した男が一人、立っていた。

「……誰かしら？」

「俺か？俺なら神村かむらで良いぞ」

「神村？……！もしかして、これに心当たりは！？」

レミリアはその男、神村に例の木箱を渡す。

箱を開け、中の手紙に軽く目を通した神村は怪訝な顔をする。

「あ？んだこりゃ……ああ、これ書いたの家の御先祖サマだな、間違いない。幻想郷で神村なんて姓を名乗ってんのは家ぐらいだ」

「何か、知ってるの？」

「ああ、背景に至るまで概ね知ってる。で、どうしたいんだ？」

「貴方の知っている限りで良い、私に教えてくれないかしら。その時代に何があったのか」

「なんで？お前部外者だろ？」

「……これを見て」

レミリアは本の『エピル』と書かれたあるページを見せた。

「私はこいつと戦った事がある」

「それは幻想郷でか！？」

「ええ、まだ居付いてると思うわ」

「何だと……」

「これでまだ、私を部外者扱いするのかしら？」

神村はしばらく考え込むように沈黙し、

「俺の一存じゃ決めれん……とにかく、いったん来い。あのジジババ共にも伝えんと」

その鳥居から横道にそれた直ぐに、今まで暗がりでは解らなかったがかなり大きな屋敷があった。

「神村家先祖代々の屋敷だ。まあ15代目の俺一人で住むにはでか過ぎてよう手入れなどできんが」

玄関先から居間へ通され、中央の炉に火がつけられた。

明るくなった部屋で見えた神村の容姿は、茶色の癖が強い髪を襟元まで伸ばし、細身を黒いジャケットで覆った身長180程度の若めの男だった。

「ま、好きにしてろ。俺はちょっと出掛けてくる…向こうに屋敷の渡り廊下と戸が見えるが、そのむこうには行かないでくれよ」

そう言うとき神村はその渡り廊下の突き当たりに見える戸の向こうへ消えた。

好きにしろと言われても何もする事も無く待ち続けること一時間。

「！」

居間の戸が勢い良く引かれ、そこには身を巫女服にまとい、艶のある黒髪を肩口で切りそろえた妙齡の女が立っていた。

「……れ、霊夢？」

レミリアがそう思わずつぶやいた程に目の前の女と、博麗神社の巫女である博麗霊夢は良く似た顔立ちをしていた。

「貴様か？あれが言うていたのは」

「え……？」

しかし霊夢とは似ても似つかぬ高圧的な言葉使いと、一瞬で部屋の空気を支配した凄まじい覇気と眼光にややたじろぐ。

「どうなのだ。600年前がどうのこうのと言っていたのは貴様ではないのか？」

「…ええ、そうだけど、貴女は」

「妾か？妾の事はレイカと呼べ」
わらわ

「じゃあ……レイカ」

鋭く射抜き続ける双眸について遠慮した口調になってしまふほど、レイカの存在感は今までレミリアが出会ってきたあらゆる人妖より圧倒的だった。

「何だ。妾に答えられる事なら考えてやらん事も無い」

「600年前の幻想郷に、何が？」

数秒の沈黙の後、レイカはゆっくりと、一つ一つはっきりと語りだした。

「…大戦だ。異界より参りし者共からこの幻想郷を守るために、この地に根を張る全ての人妖が結集して戦った」

「奴らはな、魔獣と呼ばれるおぞましい化け物を多数従え、また自らも魔術を操り暴れまわった。妾もまた、とある剣士と僧兵の三人とで、奴らと戦った」

「戦には勝った。だが、それは皆が必死に粘りに粘り、泥沼の末に追い返しただけにすぎない。だから、奴らが二度とこちらに来れぬよう、手を打った。此処への道中、貴様もその痕跡を見ただろう」

「あの、妙な向きをした鳥居の事かしら？」

「そうだ。あれらは。この屋敷の渡り廊下を渡った先にある“慶照院”を囲むように建てられている。そして慶照院もまた、あるもの

を取り囲んでいる」

「空の門。^{エア・ゲート} 奴らが幻想郷を襲う時に使った侵入経路だ。最初は破壊を試みたのだが、それが出来ぬと解り、幾重もの結界を重ねて封印しておる。妾らはその結界を作る際に、自らをも含めた多数の人柱を立て、強力な結界を完成させた。その後、妾と、仲間の剣士と僧兵は術式により生前と変わらぬ姿のまま魂を現世に留め、慶照院を守り、空の門と、その向こうに広がる異世界“クラウドディア”を監視している。600年前からな」

「…その事は何故、他の者には知らされていないのかしら？」

「妖怪の賢者たる、八雲紫様^{やくもゆかり}の指示だ。その当時の者共も皆、何かしら大戦で失っておる。一刻も早く忘れてしまいたかったのだろう」

「その後は、何も無かったの？」

「特に無い。強いて言うなら、数年に一度、魔獣を使ってちよっかいを掛けてくるぐらいか。まあ概ね平和であった所へ貴様が面倒を持ちこんで来たようだが。エピルの件だったか？話してみよ」

「……………だいたい、200年程前の事。私の館の地下に、一匹の妙なヒトガタの化け物が入り込んだ。そいつは特に何かをするわけではなかったけど、そいつの邪氣に当てられて、異形が多く群がりだしたから、館の使用人達を連れて討伐を試みた」

「結果は惨敗。いいように蹴られ、倒れた私は生き残った使用人達に地上へと運び出された。その使用人達も私を庇ったり、逃げる時の怪我が原因で倒れた。100人余で向かって、生きて帰ったのは私1人。それ以来、城の地下へは一部を除いて出入口を全て塞ぎ、今では地下の事を知ってるのは他に居なくなった」

「…それは災難だったな。あれは妾らの時にも猛威をふるっておっ

たぞ」

レミリアの言葉を聞き終えたレイカが溜息をつく。

「エピルは基本的に己のテリトリーを侵されぬ限り暴れるような事はないと思うが、問題は群がってきた魔獣共か。まあ何らかの対策は此方で考えておこう…直に夜も明ける。アレに言いつけておく故、今日は此処で休んでいけ。では、頼んだぞ。そこで盗み聞きしているのだろうか？」

「げっ、ばれてやがったか」

「ふん、未熟な貴様が中途半端に気を絶った所で、妾を欺くには10年早いわ」

「チッ、しゃあねえな。客人のために一働きしてくるか」

戸の陰から神村の声と歩み去ってゆく足音が聞こえた。

1-2 (後書き)

人物紹介

神村^{かむら}

年齢26

身長177cm

幻想郷の西端の森の中にある屋敷に住む人間の男。26歳。
腰に帯びた打刀を武器とする。

レイカ

年齢不詳

身長164cm

カムラと同じく、大戦で暴れまわり、亡霊として現世に止まっている。
享年28歳。

生前は現役の巫女。

一人称は妾^{わらわ}

実はプライドをくすぐられるのに弱い。

亡霊だが、生前の肉体を霊力で擬似再現しているため、老いない以外は普通の人間と特に変わりはない。

霊術に魔術もどき、棒術と幅広い戦闘スタイルを持つ。

「どうした、儂の顔に何か付いとるのか？」

「……………」

「…嬢ちゃん、気持ちは解るぜ。目覚めて早々アレは肝と脳に毒だ」

神村邸居間

神村が運んで来た布団で目を覚ましたレミリアの枕元に巨人が居た。浅黒の肌をし頭を剃り上げ、いかにも僧侶といった風貌の男である。

しかしレミリアを無言にさせたのはそこでは無く、体格にあった。

身の丈は2メートルを超え、身長に見合うだけの横幅と厚みの筋肉で包まれており、顔には眼帯を付けている左目を中心に大小の傷痕がある。

一言で言うならば、どこの極悪人かと思うような容姿だった。

「……………」

「…嬢ちゃん、このおっさんは、あのババ：レイカさんの仲間の一
人の僧兵だ。見た目はアレだが、良い人だぞ」

「ケイジだ。勿論、僧としての院殿号や道号、戒名、位号はあるが、
儂は俗名で通しておる」

「……………」

「…ケイジ殿、寝起きの者にいらぬ悪戯はそこまでにして、皆もそ

ろそろ朝餉にいたさぬか？」

「おお、カムラか。主は何時もどこからともなくやってくるのう」
新たに現れた、神村と良く似た容姿に同じ名で呼ばれた男が朝食に誘いに来た。

「…ああ、その客人には名乗りがまだであったか。我は、カムラ。
その神村は我の子孫にあたる男だ。出来の程は不満だがな」

「何時も一言多いんだよ、ジジイは」

「20年我の教えとともに剣を振って、いまだに我の半分にしか及ばぬ実力しか無いというのに、これを不満と言わず何と言うのだ」

「ジジイの教え方が悪い。あんなのただ苦しい思いしてるだけじゃねえか！それに人外スペック持ってるお前等と比べるな！」

「苦しくない修行など有りはせんわ！この根性無しめ、男ならもつと…」

「まあ、落ち着け。客人の前で親子喧嘩などという見つとも無い真似をするでない。第一、カムラが何故此処へ来たのか忘れたのか？」

「…チッ、ケイジ殿の言う通りだ。貴様の根性を叩き潰すのは朝餉の後にしよう」

「潰してどうすんだよ、俺を再起不能にする気か」

「……………」

急展開に付いていけないレミリアは終始無言だった。

「…さて、皆揃ったところで、例の話の確認をしようと思うのだが」
別室での朝食後、揃う五人のなかで上座に座ったケイジの言に一名

を除いた全員が顔つきを変えた。

「基本は現状維持。んで、俺が嬢ちゃんを館まで送っていく」
神村がかなり端折った予定を述べる。

「まあ武術しか能の無い農らだけではどうしようも出来ぬからな。
頭を使う事はレイカに任せる」

「全く、貴様等は妾が居ないと何もできんのか：仕様の無い奴らめ」
円座の一角から何か聞こえた気がするが、一同はスルーした。

「西端、つまりこの神村邸から幻想郷の中央やや東寄りにある人里
へ向かうには森を抜ける必要があるが、それには二つの道がある」
カムラのレミリアに向けた説明が何の前触れもなく始まる。

「一つは神村邸の南から細く入り組み、草木の生い茂る獣道を二時
(約4時間) 近くかけて抜ける道」

「もう一つは、北の慶照院の方へいったん向かい、そこから東へ下
る道。此方は森を抜けるのに二刻(約1時間)で済むが、悪しきも
のを幻想郷に蔓延らせない為の結界の中へ入らねばならぬゆえ、道
中危険が付き纏う」

「“悪しきもの”：魔獣にいつ何時襲われるか解らぬ故、我が不肖
の子孫を供につけておく。盾代わりにでもするがいい」

「此方で何か進展があればアレを遣わせる。此処で話した内容につ
いて余所で口を滑らせようものなら、斬るぞ」
それだけ言い終わると、床に据えてあった自身の黒塗鞘の太刀を掴

み部屋を出て行った。

「いきなり過ぎて色々混乱してると思うが、そういう事になった。まあ俺結構強いからさ、よほどの大群か大物魔獣が出てこない限り、嬢ちゃんに指一本触れさせやせんよ」

「……さて、そろそろ時間だな。行くか」

「…何故、朝のうちに掛けたの？」

「いや、この時間帯の方が魔獣に襲われにくいんだよ。まあ明確なデータがあるわけじゃないからただの感覚なんだが」

昼前の神村邸。

何の変哲もない普段着に帯刀という出で立ちの神村と、ドレスの上にフード付で指先までおさまるほど袖の長い薄手のコートを纏い、槍と日傘を背負っているレミリア。

直射日光厳禁の吸血鬼であるレミリアは日中の外出時は常に日傘を手放さないのだが、その日傘で片手が埋まる事に嫌な顔をする神村の提案で、彼の母親がかつて使っていたコートを着ることになった。

「ようは肌を陽にさらさなければ良いんだろ？ 日傘を持ってたんじゃないぞという時に動けんからな。あ、そのコートは傷付けようが汚そうが気にしないでいいぞ」

屋敷を出て鳥居をくぐり、やや進んだところを東へ曲がる。

「この森は俺らが数ヵ月に一度ぐらいの回数で魔獣狩りに来るんだが、最後に狩りに来たのが二ヵ月前だな」

「気を付けろと？」

「そういう事だな。さあて今日は何が出てくるか…」

「参考までに、今まで何が出たのか聞いておこうかしら」

「ん？ そうだな…ヘラクなんとか、っていう虫みたいなドラゴンが居たな。ジジイが問答無用で真っ二つにしたが。あとはラヴィレンスってでかいトカゲもどきとか。アレはおっさんが細切れにしちまった。他にもエンプレスホーネット…大人並みの大きさのスズメバチの大群。ババアが一匹残らず消し飛ばした。蜂の子を炒って口に入れてみたら卵焼きのような味がしたぞ」

「貴方はその時何をしてたのかしら？」

「三人の後ろの方で雑魚の群れを担当してた」

「…何も出てこない事を祈るわ」

「そうしてくれ。キメラ辺りならともかく、イヴァローラとか来られても俺は自分の命一つで手一杯だ。嬢ちゃんの方までカバーしてやる余裕はない」

「自分の身ぐらい自分で守るわよ」

幅が3メートル程ある一本道の中央をそれきり無言で歩いていた時、茂みの一角に動きがあった。

「…！嬢ちゃん、気い付けろ。何かいたぞ」

「…言われなくとも気付いてるわ」

「なら話は早い。俺に任せて、下がってな……」

刀の鐔に手を掛け腰を落とし、鋭く抜き放つ。

茂みへ向かって真っ直ぐに飛んだ真空の刃が潜んでいた何かを切り裂いた。

しかし、それを耐えた何かが茂みを飛び出し、二人の方へ駆け出す。
「へえ、マッドトプスカ」

何かとは、角が両目から突き出ている以外はトリケラトプスに良く似た姿をしている魔獣、マッドトプスだった。

抜いた刀を立てて右手側に寄せ、左足を前に出して八相構えを取った神村がマッドトプスの突進の脇をすり抜けざまに斬りつけるも、突進の勢いは弱らず、下がっていたレミリアへと向かっていく。

「そこ動くなよ！」

再び飛んだ真空刃が脇を挟み、今度はマッドトプスの身体が前後に切り離され、苦痛を訴える様な一鳴きとともに魔獣は動かなくなった。

三度の攻撃がすべて同じ個所を正確に斬り付けている事を確認したレミリアが、コートに付着した魔獣の体液を気にしながら神村に歩み寄る。

「……強いのは本当のようね」

「まあな。だが、ジジイ共なら最初の一撃で終わってるさ」

「素晴らしい御先祖様と仲間達ね」

「……口煩いだけさ。ほら、とっとと行くぞ」

言葉とは裏腹に上機嫌な神村が半紙で拭った刀を鞘に納め、再び歩き出す。

レミリアもコートの汚れを諦め彼の後を追った。

113 (後書き)

人物紹介

カムラ

年齢不詳

身長174cm

前述した神村の先祖にあたる人物。

カムラの嫡男を初代として数えて神村は15代目。

600年前に幻想郷で起きた“大戦”で太刀を手に大暴れし、死後も亡霊として現世に止まる。享年31歳。

一人称は我^{われ}

ケイジ

年齢不詳

身長201cm

レイカ、カムラと同じく亡霊。享年42歳。

元僧兵の経歴を持つ。

一人称は儂^{わし}

2メートル超の身長にも劣らぬ横幅と厚みのある屈強な身体を持つ。槍術を得意とする。

マッドトプス以来、少数の魔獣や野生動物に襲われるも神村が片端から切り捨てていったが、マシーナリモスキートの金属材の身体を斬り付けた際に、魔獣の体液や堅皮で刃が欠けたり、切れ味が落ちていた打刀がとうとう折れてしまい、折れた大小の刀身の欠片を丁寧に取り集めた神村が軽くショックを受けていた以外は特に問題なく森を抜けた二人。

因みに、慶照院という明らかに寺の名前をした施設を囲むのが何故鳥居なのか、レミリアは疑問だったが神村もそれについては知らないようだった。

森を抜け、そのまま東へ向かううちに日が暮れはじめ、人里へたどり着く頃には辺りが薄暗くなる逢魔時（午後6時頃。魍魎魍魎が活動を始めると言われ、不吉な時とされた）へ差し掛かっていた。

幻想郷のほぼ全ての人間が生活基盤を置く人里は、幻想郷1安全な場所と言われる。

それも“妖怪の賢者”と呼ばれ、幻想郷の最古参にして最強とも噂される大妖怪、八雲紫が里の名目上の責任者とされており、何者かが里内で狼藉を働く事は彼女への宣戦布告に等しい行為になるため、誰もが不埒な行いを慎んできたためである。

逆を言えば、里外で妖怪や悪魔等に日々の糧として補食されたり、気の赴くままに虐殺されようとも、運が悪かったとして泣き寝入りしなければならぬのが人間達の現実であったりする。

里外で暮らす人間も居るには居るが、それはその人間が並の妖怪を寄せ付けない程の強者であったり、そういった者の後ろ楯を得ている者のどちらかが大半である。

もったも、これは極論かつ古い話であり、現在は紫の考案したあるシステムの導入によりこういった事は滅多に起こらなくなっている。

「…よし着いたな。えーと、今晚は里で一泊した後、嬢ちゃんの館…紅…名前何だっけ？まで行くでしょう」

「紅魔館よ。別に、森さえ抜けられれば後は私だけで帰れるんだけど」

「駄目だ。館まで嬢ちゃんを送るまでが仕事なのに途中放棄、しかも女子供に夜道を1人で歩かせたとあっちゃ後でジジイ共に何言われるかわからん」

「……」

「俺の側に居てくれよ。嬢ちゃんが存在が俺には必要なんだ」

「そこだけ聞けば素敵な求愛の言葉なのに、前置きの愚痴で全て台無しね」

「大丈夫だ。俺もそのつもりで言ってる。俺は心身共に大人びた女が好きなんだ。身長五尺（約150cm）あるかないかの嬢ちゃんをそういう目で見やしねえ」

「……つまり、私は女として眼中に無い、と言う事かしら？私にその気が無くとも、黙って聞き流すにはいけない話ね」

「…何故そうなる？まあ良い、付いて来な。せっかく人里へ来たんだからやまあいرونなところに顔出してこねえと」

「……おい、ハル！」

人里からいきなり裏通りへ入り、表通りはまだ薄暗いの既に暗闇になっている中を歩く2人。

神村は裏通りにあるやや開けた土地に建つ一軒へ、正確にはその一軒の窓枠で頬杖をつき紙巻煙草を吹かしていた1人の女性に声を掛けた。

「？…おや、神村じゃないか。……待ってな、いま亭主を呼んでくるよ」

「おう、悪いな」

神村にハルと呼ばれた女性は、くわえていた煙草を手を持ち、窓の奥へ消えた。

待つ事十数秒、玄関の戸が横へ開かれ、呼ばれた亭主が姿を現す。

「やあ、神村…にそのお連れさん。よく来てくれたね。まあ入りなよ」

身長160前半と思しき小柄な身体を落ち着いた色調の和装に包む、丁寧で人の良さそうな青年だった。

青年に案内された軒内は入口から向かって左に木目の美しいカウンターが置かれ、向かって右には多くの座敷と机があった。

「お連れさん、はじめまして。人里の片隅でひっそりと酒場をやっている。本名が重次だから、皆からはシゲって呼ばれてるよ。此方は妻の晴奈。通称はハル」

「ハルだよ。亭主や神村とは腐れ縁さ」

「…常連さん達が来るにはまだ時間があると思うし、先に飲むかい？ 今なら強い酒が入ってるよ」

酒と聞いては黙ってられぬ、と神村がカウンターから身を乗り出す。

「へえ、ウオッカでも仕入れたのか？」

「残念。ポーランドでもロシアでも無いよ…」

シゲが奥の棚から酒瓶を持ってくる。

「…スコットランドさ」

「ピュアリー・フォー・ファンか。また珍しい酒だな」

「…飲んでみるかい？」

「…当たり前だろ。グラス持ってこい」

「ふふっ、気を付けて、ゆっくり飲みなよ」

五分後。

「ほら言わんこっちゃない」

カウンターに突っ伏した神村からグラスを回収したシゲ。

「アルコール92%の蒸留酒をともに飲んだらつぶれるに決まってるよ…お連れさん、君はどうだい？」

「遠慮しておくわ」

「そう。残念…おや？」

玄関先が騒がしくなり、店内に若者の集団が入ってくる。

「いらっしやい。今日は早いね」

「へへ、まあ…おっ、神村さんじゃないですか!？」

「おい、お前ら、今日は神村の兄貴も居るぞ！」

「何!?! こうしちゃ居られねえ…神村さん、こんばんは！」

二十歳には満たない人間の若者、しかも柄の悪そうなチンピラ集団約10名にも慣れた顔付きで接するシゲ、ハル夫妻。

「…ん? おい、こっちに可愛い娘も居るぞ! 今日は最高の飲み日和だ！」

「いや、ちょっと小さくね? それに明らかに妖怪じゃねえか…穴が開いてりゃ誰でも良いのかお前は!？」

「いくら俺が女好きだからってんな訳無いだろ！」

「喧嘩ならそこまでにしてさっさと注文出しな野郎共！」

「あ、ハルさんスンマセンした! いつものやつでお願いしやす！」
「よし」

ハルの一喝で座敷やカウンターに散ったチンピラ達。
そのうち1人がレミリアを指差し問う。

「シゲさん、その可愛い娘は何処で見つけたんすか？」

「この娘は神村のお連れさんだよ。手は出さないでね」

「神村さんが？意外だなあ、神村さんの女にまつわる話って全然聞かないんですけど」

「別に、恋人ではないと思う。それに、神村にも好きな女はいるよ。しかも現在進行形で惚れてる相手がね」

「惚れてる？シゲさん、詳しく話してくださいよ！」

「おう、俺も聞きたいっす！」

「俺も！」

「…せっかく当人が酔いつぶれてるんだし、洗いざらい喋っちゃおうかな。他人の色恋沙汰ほど美味い肴もそうないだろうし。ねえ、ハル？」

「やっちゃいなよ」

ニヤニヤといやらしい顔付きになったシゲに悪ノリしたハル。

それに合わせて場が静かになると同時に、一言一句聞き漏らすまい、と熱気が充満する。

「……あれは、去年の春先の事だったなあ……」

「…あの手この手でその女性の気を惹こうと頑張ってた神村を僕達二人で陰から応援してたんだよ。でも結果は芳しくなくてね。まあ失敗だったよ」

「でね、冬になって、とうとうありったけの勇気を総動員してさ、想いを打ち明けたんだよ。僕らでさりげなく二人きりになれる場と

しい名前が出たぞ!!」

「寺子屋の慧音先生か、俺らも数年前までよく喧嘩して怒鳴られたよな!？」

「俺はバケツ持って廊下に立たされたぜ!バケツの中身は水じゃなくてコンクリだったけどよ!」

「甘いな、俺なんて頭突きされたぞ!慧音先生は石頭だからな、物理的な意味で!」

「ははっ、僕も喧嘩で4人のしたのチクられて、先生から頭突きの四連撃をくらった事があるよ。その時ハルは僕を置いて逃げたけど捕まって六連撃だったよね」

「すげえ、流石俺ら喧嘩屋の大先輩!聞きやしたよ、当時の不良共はシゲ・ハルの名を聞いた途端に有り金全部差し出して土下座するぐらい恐れられたワルだったって」

「…昔の話だよ」

「神村さん、よくあんな人に手を出しましたね。しかもフラれてなお一途にアタックし続けるとか」

「ああ?何の話してんだお前等?」

「…うおう!?!神村さん、いつの間に起きてたんすか!?!」

首を鳴らしながら身を起こした神村がニヤついたり、さりげなく視線をそらす周囲を見渡し、

「おいシゲ、嫌な予感がするんだが、これは何の騒ぎだ?まさか、俺が寝てる間に何かしやがったんじゃない?」

「気のせいだよ。夜風にでも当たって、ちゃんと目を覚ましてきたらどうだい?」

「…そうするか。嬢ちゃんも来るか?こんな野郎共のたまり場に一

人は居づらかったろ」

「そうさせてもらうわ」

さも何事も無かったのごとく澄まし顔のシゲの提案に乗り、店を出ていく神村とレミリア。

「さて、当人が居なくなった所で、もう少し盛り上がりうか？」

「ははっ、シゲさん最高だぜ！」

1-4 (後書き)

今回は紹介等はなし。

ご意見・ご感想等お待ちしております

「…さて、かるく裏通りを歩いてみるか」

「おお、お前は神村だな！」

「あ？今度は誰…：なんだ、ヤクザのしがない中堅組員のカズかよ。夜逃げ人の搜索か？」

「まあ、そんなところだ。後いい加減その呼び方やめろ、哀しくなる…それより神村よ、聞いたか？今朝うちの事務所に紅魔館とこの狂犬メイドが来てよお、お嬢様何処行ったか知りませんかーなんて言ってたぞ。慧音先生の所にも聞きに行ったらしいし、お前やシゲの所にも来ると思うぞ？なんたって組長がお前等の名前出したからな。地元のゴロツキ共を纏められて、かつ顔の広いシゲと神村なら、何か知ってるかもしれん、とな」

「はあ？勝手な事言いやがって…第一、その狂犬メイドとその御嬢様って誰？名前も顔も知らんのに行方なぞ知るわけないだろ」

「そうか、お前は数ヵ月に一度くらいしか人里に寄り付かんから知らんか。狂犬メイドってのは十六夜咲夜^{いざよひさくや}って言う人間の女の事だ。主人の事となると形振り構わんから俺らの間では狂犬って呼んでる。御嬢様の方は…姿は見たこと無いが、レミリア・スカーレットとか言う吸血鬼だな」

「……………名前は知らんが、吸血鬼の知り合いなら最近出来たな。もしやとは思うが…嬢ちゃん？」

「そういえば、まだ貴方には名乗って無かったわね。私がそのレミリア・スカーレットよ」

「…世間ってなんでこんなに狭いんだろうな。というか、嬢ちゃんは身内に行き先も期間も告げずに来たのかよ？」

「告げた筈んだけど…2、3日出掛けるって」

「期間だけでフラッと居なくなったら普通は心配するけどな。折角

だ、会って来いよ」

「さすがに帰ってると思うけど。つまり私は先に館に帰って良いという事かしら？」

「…それもそうだ。じゃあ結局当初の予定と何も変わらんな」

神村とレミリアが出てから約10分後。

「……でさ、そんな身体じゃ誰も貰ってくれないだろ、って言ったらハルが、お前の嫁になるから大丈夫だ！って宣言して、本当にそのまま押しかけ女房になっちゃってさ、今に至るんだよ」

「へえー、シゲさん羨ましいっすよ、女の方から寄って来てくれるとか。俺らと真逆じゃないっすか」

「ははっ、こんな展開は予想外だったよ。まあ今がそこそこ幸せだから良いけどね」

神村の色恋沙汰から何時の間にか2人の馴れ初めの話に変わっていった酒場。

「夜分遅くに申し訳ない。ちょっと聞きたい事があるのだが…」

「おや、今日は突然の来客の多い日だねえ…って、けっ、慧音先生…それに、吸血鬼の館の…」

新たに入った女性二人。

片方は先ほどまで話に出て来ていた上白沢慧音。

そしてもう片方はあの紅魔館のメイド長であり、レミリアに代わって館に関する事を取り仕切っていた十六夜咲夜である。

「相変わらず此処はゴロツキの溜まり場だな。お前達も少しは親に心配をかけないよう…」

「まあまあ先生、此処で説教は勘弁してよ。それより、聞きたい事って何かな?」

「…紅魔館の主人についてだ」

慧音は咲夜に後を譲る。

「御嬢様が先日、ふらりと館を出て行ってしまったきり、戻ってきません。何か知っている事はありますか?」

咲夜が取り出した御嬢様の写真を受け取りながら、シゲはもう秋なのに膝が見えるほどスカートの丈が短いメイド服で寒くないのだろうか、等と余計な事を考えていたりする。

「どれどれ……………皆、ちょっと来て」

シゲが一筋の冷や汗を流したのを不審がり、手招きに応じてハルや男数人が写真を覗き込み、皆一様に顔を引き攣らせながら互いを見合わせる。

「おい…これ」

「ああ、間違いねえ…」

「俺、手出さなくて良かった…」

「知っている事があるなら、教えて頂けませんか?」

「…知っているも何も、この店に居たよ。ついさっきまで」

「本当ですか!? では、どちらに行ったかなどは…」

「そこまでは知らないよ。まあ神村の事だから後1時間もしないうちに店に戻ってくると思うけど…」

「…ちょっと待て、何故そこで神村の名前が出る?」

神村の二文字に反応した慧音が話に割り込んできた。

「店に連れて来てたからだよ。そもそも何で神村が吸血鬼なんて連れまわしてたのかは知らないけどさ」

「あいつは何をやってるんだ…まさか、とうとう善からぬ事に手を染める気じゃ」

「後1時間程度なら、此処で待たせて頂いても？」

「構わないよ。ただし、何か頼んでいってくれたら嬉しいな？」

「では…」

なにやら一人でつぶやき出した慧音を無視し、待ち合わせと商売の取引をかわしたシゲと咲夜。

「…それで、先生はどうします？」

「あれに限ってそんな…」

「先生？」

「…ん？ああ、私も残るぞ！何を思って深夜に女を連れまわしているのか、教壇に立つ者として直接問いただしてやる必要がある！」

「毎度あり」

「おい、お前等、慧音先生が店に居残ったら…」

「ああ、俺らにもいつ何のとぼっちりが来るかわからんぞ」

「俺達が平穩に酒を飲み、女人禁制話に花を咲かせるために、取れる方法はひとつ」

「酔わせちまえ」

「だが、中途半端じゃ余計ヒートアップするだけだ。やるなら、意識が飛ぶくらい徹底的に…」

「シゲさん、慧音先生にアレを御馳走しましょうや！」

「アレ？…ああ、成程。ハル、『アルコールドリンク』持ってきて！」

「よし、任せときな」

何故かこの一瞬で心を通じ合わせた野郎達十ハル。

「アルコールドリンク？それは普通の酒の事ではないのか？」

「先生。うちの店では地味に売れる特性ドリンクですよ。甘みと喉越しのバランスに定評があつて、是非とも先生に、とね」

一時間後。

「シゲさん、大成功っすね！」

カウンターで綺麗に酔い潰れた慧音をハルが店の奥へ運んだ。

「…何を飲ませたのですか？」

ちびちびとワインを飲んでいた咲夜が、此処まで道案内をしてもらった慧音を心配して、ドリンクの正体を尋ねる。

「アルコールドリンクはね、アルコール入りスポーツドリンクの略さ。酔い潰したい相手が居る時とかによく売れるよ」

「……そうですか」

そして、シゲが予想していた時刻より誤差三分。

頭が冴えてきた神村が店に戻ってきた。

「やあ、神村にお連れさん。お客様だよ」

「御嬢様、今まで何処へ行かれていたのですか！？しかも御一人で！」

「たかが1日家を開けただけじゃない。何をそこまで心配して…」
「日数ではなく、何故誰にも告げずに出て行ったのが問題です！館の者は皆どれだけ心配したか…」

「心配は嬉しいけど、大袈裟よ。それに、あまり動かれるのも困り者。さっき話を聞いたら、咲夜の事を狂犬なんて呼ぶ輩が居たわ。貴女の悪評がひいては紅魔館全体や私の悪評に繋がるのだから、私の従者としての自覚を持って、慎みある行動をしなさい」

「……申し訳ありませんでした…あの、それで、そちらの方は…？」

咲夜が神村の方を不審げに見やる。

「俺？ああ、俺は神村。下の名前は聞くな。言いたくない。ガキの頃、ダサイと散々にからかわれたからな」

「何の目的で御嬢様を？」

「さてね」

「ふざけているのですか」

「俺から言える事はただ一つ。世の中には、迂闊に関わっちゃいけない事が沢山あるのさ。あんまりお喋りが過ぎると…こうだ」

神村は自分の首筋に指をあて、横へ引いた。

「…嬢ちゃんも、口には気を付けておけよ。600年前に出来た緊急連絡網はまだ生きてるからな？」

「解ってるわよ…：あら、何処へ行くのかしら？」

「朝まで一寝入りしたら、帰るよ。迎えが来てるんなら、わざわざ俺がついてなきゃいけない理由がない」

あれほど最後まで送り届ける事にこだわっていながら、颯爽と身と前言を翻した神村。

「なぜだかな、嬢ちゃんとは近いうちにまた会わなきゃならん気が

するよ。じゃあな」

「奇遇ね。私も貴方と嫌でも関わらざるを得ない運命を感じたわ。道中、気を付けて」

「…それは俺の台詞だぜ」

「あ、神村さん代金払わず行っちゃいましたよ…シゲさん、良いんですか？」

「良いよ。神村は何時も釣りはいらん、とか言って請求額の二倍くらい置いてくから。タダ飲みの一回や二回、見逃すよ」

幻想郷・慶照院中央塔最上階。

「……？」

慶照院には二重の結界が張られている。

一つは鳥居を中心とした、魔獣が幻想郷に蔓延るのを防ぐための結界。

もう一つは、この中央塔を中心とするエア・ゲートそのものを封じ込め、監視するための結界。

その結界の不審な揺らぎを感じ取ったレイカが大麻（おおぬさ…榊の木）の枝に紙垂等しでを付けた物。御祓いの時等に神主が左右に振っているアレレを手に此処まで登り、自身のすぐ真上にある膨張と縮小を繰り返す平均直径50メートルに及ぶ巨大な漆黒の大穴を見上げていた。

ゲートが突然煌めいたかと思うと、三匹の魔獣が飛び込んでくる。中でも特に大型の一体には見覚えがあった。

「……水麗龍か！」

三つ首の魔獣、水麗龍ニーズヘッグを中心に、ほか二体も比較的強力な存在である事を確認したレイカが階下へ呼び掛ける。

「…カムラ、ケイジ、参れっ！！」

「…魔獣か。承知」

「ふむ、今日は中々の大物ではないか。どれ、儂も行くでしょう」

太刀と槍を手にした2人がゆっくりと慶照院の庭へ出てくる。

レイカもまた、自身の身の丈程もある、武器としての打棒の役割を兼ねる特注の大麻を軽く振り、塔から飛び降りた。

3人と三匹が戦いを始めた片隅で、こっそりと1匹の小さな蛇がエア・ゲートを抜け、慶照院外の森へ抜けて行ったが、それには誰も気付かなかった。

1-5 (後書き)

かみしらさわ
上白沢 慧音 けいね

年齢不詳

身長172cm

寺子屋で人里の子供に初等、中等教育を行っている、半人半獣の女性。半獣と言っても、外見は普通の人間である。

また、人里で何らかの騒動が起きた場合、真っ先に争いへ介入、必要あらば武力行使も行う『人里の守護者』の職務も兼任する。

神村に好意を寄せられており、繰り返されるアタックに素っ気ない対応を返すが、内心嬉しく思っているようだ。

いざよひ
十六夜 咲夜 しゃい

年齢19

身長170cm

銀色の両サイドがハネたショートカット。

レミリアに忠誠を誓う従者であり、紅魔館のメイド長として館の管理や使用人の統率等を任されている人間の少女。

腰に付けた大型ナイフの他に、メイド服の下に投げつける為の多数のダガーを隠し持っており、30m程度の距離ならばほぼ確実に当てられる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0329y/>

Fly Hight Fantasia

2011年11月21日18時06分発行